

町内の平穏願う虫送り

6月10日(土)、山道町内会(一戸雅人会長)はその年の五穀豊穡などを願う「虫送り」を行いました。虫送りは、田植えを終えた時期に農作物への害虫被害がおきないように願う農村行事です。同会は東日本大震災を契機に2011年から虫送りを再開し、毎年行っています。

当日は町内会員たちが稲わらで長さ約3.5mの「虫」と呼ばれる籠に似せたものを作り、同地区の第二松倉橋に取り付けて、五穀豊穡や悪疫退散などを願いました。



第二松倉橋に「虫」を取り付ける山道町内会の人たち



さつま町産のカボチャを買い求めるお客さん

県内外の道の駅が参加 あるじゃ周年祭

6月17日・18日の2日間、道の駅つるた「鶴の里あるじゃ」で、22周年記念祭が開催されました。町が友好交流協定を結ぶ鹿児島県さつま町や、あるじゃが交流を持つ県内外の16の道の駅が参加しました。

さつま町のブースでは、周年祭で大人気のさつま町直送のカボチャやさつま揚げを求める買い物客でにぎわっていました。

道の駅つるたによると、2日間で町内外から約15,000人が訪れたそうです。

高齢者世帯の水回りを点検ボランティア

鶴田町上下水道協会(山田松男会長)が6月19日(月)、鶴田町社会福祉協議会と協力し、町内の高齢者世帯の水道設備の点検や修繕のボランティア活動を7年ぶりに行いました。

ボランティア活動には協会に所属する町内の9業者が参加。ボランティアを必要とする町内の29世帯を訪問し、蛇口やトイレ、風呂場などの水回りの点検や修繕を無償で行いました。



蛇口の点検を行う山田会長とそれを見守る住民
【写真：鶴田町社協提供】



Vol.54(筆：毛利精悟)

移住して瞬く間の3か月。町の企画観光課に所属し、「事業承継の推進」「町の宣伝」等を目的として活動中です。(フェイスブック・インスタ配信中。町のホームページ内で「地域おこし協力隊」で検索くだされば嬉しいです)

4月5月は(有)津軽ぶどう村でジュースの通信販売や会社の決算等を学ばせていただきました。貞次郎社長の手ほどきでスチューベンの栽培もさせていただいています。

6月は「道の駅あるじゃ」の一時従業員として、加工場でのジュース瓶詰めや、周年祭では開催準備や撤収、スイカ・メロンなどの販売を経験させていただきました。

協力隊の任期は3年間。地域の状況をできるだけ早く知り、鶴田町に貢献できる人間になりたいです。また、空き家・廃校・廃棄物を活かす活動も手がけたいので、情報を集めたいと思っています。



▲①ジュース工場 ②ぶどう栽培 ③あるじゃ周年祭
④ぶどう村須郷社長と 【Instagramより】



Facebook



Instagram

地域おこし協力隊の活動内容は、各種SNSでも確認することができます。



英語で書かれたカードを使った
「神経衰弱」を行う子供たち

英語を身近に イングリッシュデイ

6月24日(土)、子供たちに日ごろの授業よりも気軽に楽しく英語に触れてもらい、英語をより身近に感じてもらうイングリッシュ・デイが行われました。

町国際交流会館で行われたイベントには、町内の小学生約20人が参加。町国際交流員や外国語指導助手が講師を務め、補助員として鶴田町ジュニアリーダーも参加しました。子供たちは外国人講師との会話やゲームを通して英語への興味や関心を高めていました。

町特産品を知り地元への関心高める

6月27日(火)、町の特産品であるスチューベンについて学ぶため、鶴田中学校1年生約80人が町内のぶどう農家を訪問しました。

今回の体験学習は町の特産品であるスチューベンについて学び、地元への関心を高めてもらおうと、鶴田中学校が授業の一環として行いました。ぶどう園を訪れた生徒たちは生産者の指導を受けながら、ぶどうの房の大きさを整える「房作り」を体験。生徒たちはぶどうの房の大きさを定規を使って確かめてから余分な実をはさみで取り除いていました。また、生徒たちは生産者へスチューベンについて質問し、スチューベンへの理解を深めていました。

房作りを終えた生徒たちは道の駅つるたの加工施設を訪ね、ぶどうやりんごをジュースに加工する機械などを見学し、地元で採れた農産物を地元で加工し販売する農業の6次産業化についても学んでいました。

この体験学習は秋頃に収穫体験を行った後、生徒たちが体験学習で学んだ内容をレポートにまとめて、参観日等で発表する予定です。



生産者から房作りについて学び
実際に房作りを行う生徒たち



ミッションである「スチューベンの就農」を目指し、師匠から教えるという日々も早3か月が経とうとしております。今は「かたとり」「整形」の作業と格闘中です。

そんな作業の中で楽しみなのは「一服」の時間。サラリーマン時代にはなかった、いや、むしろ許されなかったこの時間。一服しながらぶどうや農業のこと、日々の出来事やこれまでの経験、知恵など様々なお話を伺え、ときにアイデアや、やる気生まれるとても有意義な時間。そして気候や作業内容、体調に応じて「一服」のメニューを変えて用意してくださるその気遣い。某会社なんかよりずっと前から「一服」で創造性を磨いてきたのだと感心すると同時にそんな「温故知新」をぜひ継承していきたいと思っています。

そんなわけで明日からも「一服」を楽しみにぶどう畑を奔走したいと思います！



▲スチューベンの房作りに取り組む葛西さん



Facebook



Instagram

地域おこし協力隊の活動内容は、SNSでも確認することができます。